世界の友だちと ぼくたち・わたしたち

所 属	愛知県立名古屋特別支援学校	**実践者**	田原 浩美
対 象	小学部6年21名（内重複学級15名）	**時間数**	39時間
場 所	教室、体育館、中部国際空港	**実践教科**	自立活動、学級活動、外国語 （給食、学習発表会、修学旅行を含む）
ねらい	・他国の文化に触れて、自分なりの感想をもつことができる。 ・自他の違いを認め合うことができる。 ・多様な文化の中で、心の同一性に気づくことができる。		

実践内容

回	プログラム	備 考
1―4	**◆パラグアイに友だちをつくろう** ・先生がこれから行くパラグアイの友だちに宛てて手紙を書く。 ・パラグアイの友だちからの手紙を受け取る。 ・ビデオレターで交流する。	実際に友だちをつくることで、パラグアイに対して親しみをもち、より興味をもてるようにした。
5―9	**◆友だちが暮らすパラグアイって どんなところ？** ・民族衣装を着て、どんな場面で着るのかを想像してみる。 ・パラグアイの音楽を聞きながら伝統舞踊を見たり、みんなで踊ったりする。 ・ゲームをしながらパラグアイのさまざまな文化（楽器、伝統舞踊、民芸品、食事、等）について知る。それぞれについての資料は持ち帰って家族にも知ってもらう。 ・パラグアイ料理を食べる。＜給食＞	 パラグアイ給食
10―31	**◆世界の友だちと交流しよう** ・パラグアイの友だちと、「みんなの笑顔」というテーマで共同作品を制作する。 ・パラグアイの友だちとダンスで交流する。 ・世界一周旅行の創作劇の練習を通して、世界の文化を知る。 ・たくさんの人に世界の人々と交流する素晴らしさを伝える。＜学習発表会＞ …海外旅行で、言語や文化の違いを感じながらも人々と心を通わせる創作劇。	 創作劇『世界の果てまでトンデＱ！』
32―33	**◆理想の世界を描こう** ・パラグアイの友だちと自分の「同じこと」と「違うこと」を考える。 ・自分とパラグアイの人々の大切なものの共通点に気づく。 ・大切なものがある世界を絵に描く。 ・理想の世界を阻む問題があることを知る。	JICA 教材『学校に行けない世界の子どもたち』
34―38	**◆日本の当たり前って世界の当たり前？セントレアで調査しよう（通常学級6名対象）** ・日本特有のものを考え、それらが本当に日本にしかないのか考える。 ・外国の人に、「あなたの国に〇〇はありますか」とインタビューする準備をする。 ・セントレアでインタビューを実施し、結果を集計する。＜修学旅行＞ ・もし、自分の当たり前を人に否定されたらどんな気持ちになるのか考えてみる。	 インタビューボード
39	**◆世界が平和になるために必要なことを考えよう（通常学級6名対象）** ・学校へ行かずに働いている子どもたちについて知る。 ・貿易ゲーム風じゃんけんゲームを通して、どうして戦争が起こるのかを考える。	 じゃんけんゲームセット

成 果	文化の学習では、食品の匂いを嗅ごうと自ら顔を近づけたり、舌を出したり、または顔をそむけて嫌がるなど、さまざまな気持ちを表現することができていた。外国の人へのインタビューでは、言葉が通じないことで緊張していたが、親切に応じてもらい親近感と達成感を感じていた。友だちの個性や世界の平和について考える学習を通して、友だちの意見を否定しないルールを守りながら、「自分や他人の考えを尊重することが大事」ということを学ぶことができた。
課 題	児童にとって自分を客観視する学習が難しいこと、また、児童の意見を言語化するのが難しい（教師が児童の意思を引き出して言語化する）ことから、パラグアイの友だちと自分の「同じこと」と「違うこと」の意見が出てきにくかった。そして、理想の世界を描くまでの流れがうまく繋がらなかった。質問の内容をもっと絞って、実態に合ったアプローチ方法を工夫し、児童や教員にねらいを伝わりやすくする必要があった。
備 考	自力歩行している児童や車椅子で姿勢を保っている児童、教科学習をしている児童や言葉での意思表示が難しい児童など、対象児童の実態は幅広い。また、一つ一つの学習に対し、見通しをもって取り組むのに時間がかかりがちである。そのため、文化を体験する学習は五感に働きかけたり、授業時間を多くとったりし、児童の反応をより引き出せるようにした。

［授業実践の詳細］

1-4 時限目「パラグアイに友だちをつくろう」

この時限のねらい

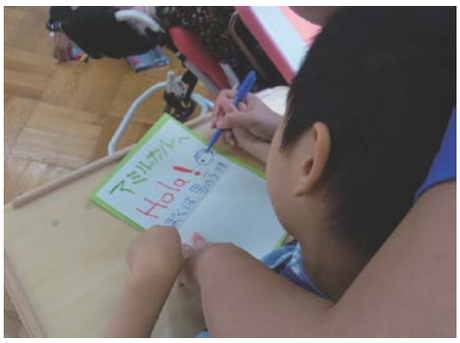
・パラグアイに友だちをつくり、パラグアイに親しみをもつことができる。
・パラグアイの友だちとのコミュニケーションを楽しむことができる。

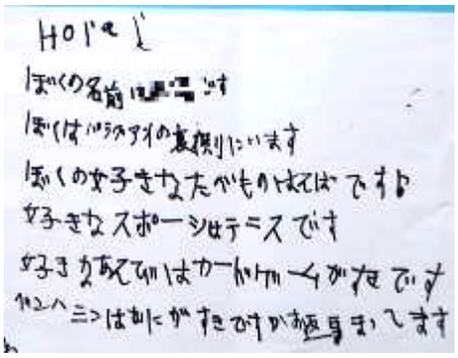
1 子どもの活動の流れ

① パラグアイの友だちに宛てて手紙を書く。
・これから先生が行くパラグアイについて、場所や季節、挨拶の言葉などを知る。友だちに手紙を書く。

② パラグアイの友だちからの手紙を受け取る。
・先生がパラグアイで手紙を交換してきた様子を映像で見て、手紙（日本語訳つき）を受け取る。二人一組でお互いの手紙を読み、パラグアイの友だちについて紹介し合う。（手紙を書いた宛名の友だちから手紙を受け取れるよう、事前に調整しておいた。Ex.アミルカル⇔まさき）

③ ビデオレターで交流する。
・手紙をくれた友だちに向けて、ビデオレターを作成する。
・パラグアイから送られてきたビデオレターを見て、感想を発表する。





＜児童が書いた手紙＞

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 地球儀でパラグアイの場所を知って驚き、手紙に「ぼくは、パラグアイの裏側にいます」と書いていた。

◇ 見慣れないスペイン語の手紙を不思議そうに眺めたり、手紙の内容を「ダンスが好きなんだってー！」と言いながら熱心に読み、友だちについて理解しようとしたりしていた。

◇ スペイン語がわからず、ビデオレターのメッセージがわからなくても、自分の名前や「オラ！」などの習った単語が聞きとれるととても喜んでいた。多くの児童が友だちの話している映像を熱心に見て、さまざまな表情で気持ちを表していた。

3 使用した教材

＜教材1＞ パラグアイ訪問についてのパワーポイント資料
＜教材2＞ パラグアイの友だちからの手紙
＜教材3＞ パラグアイから送られてきたビデオレター

5-9 時限目「友だちが暮らすパラグアイって どんなところ？」

この時限のねらい

・パラグアイの文化に触れて、自分なりの感想をもつことができる。
・好奇心をもって、さまざまな文化を受け入れることができる。

1 子どもの活動の流れ

① 民族衣装を着て、どんな場面で着るのかを想像してみる。
② パラグアイの伝統的な音楽を聞きながら伝統舞踊を見たり、みんなで踊ったりする。
③ パラグアイの文化を五感（味覚以外）で感じてみる。
・輪になってグァンパ（マテ茶の入ったコップ）を回し（テレレを再現）、爆弾ゲームの要領で音楽が止まったときにグァンパを持っている児童がくじを引く。くじに書かれたパラグアイの文化を一つずつ学ぶ。当たった文化ついての資料は、持ち帰って家族にも知ってもらう。
④ パラグアイ料理を再現した給食を食べる。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 独特のリズムや楽器の音を気に入って、手足をパタパタと動かしたり、上半身を左右に揺らしたりしてにこやかに楽しむ児童がとても多かった。

◇ テレレの茶葉や、菓子の匂いを嗅いで顔をしかめたり、手で押しのけたり、舌を出して食べたそうにする児童がいた。

◇ パラグアイ料理の独特な香りや味を気に入っていつもよりよく食べられた児童や、“変わった味だな～”考えるような表情で一口ずつ味わい完食した児童、慣れない味に馴染めずあまり食べられなかった児童がいた。

3 使用した教材

＜教材4＞ パラグアイの物（民族衣装、国旗、音楽 CD、菓子、マテ茶葉、テルモ、民芸品）
＜教材5＞ パラグアイ文化についての映像や写真をまとめたパワーポイント資料
＜教材6＞ パラグアイ文化の情報付き写真 一部、マテ茶ティーバッグやチパの菓子付き（家庭への持ち帰り用）
＜教材7＞ パラグアイ料理風の給食（アサード、エンサラダ、エンサラダ・デ・アロス、パステルマンディオカ、ソジョ、コシード）

＜普通食＞

＜ペースト状にした形態食＞

10-31 時限目「世界の友だちと交流しよう」

この時限のねらい

・言葉や文化の違いを越えて、パラグアイや世界の人との繋がりを感じることができる。
・得意なことや練習してきたことを発表し、見た人に称賛してもらうことで自信をもつことができる。

1 子どもの活動の流れ

① パラグアイの友だちと、共同作品を制作する。
・パラグアイの制作風景を映像で見て、一緒に作る意識をもちながら自画像を描く。全作品を貼り合わせて一枚にする。
② パラグアイの友だちとダンスで交流する。
・パラグアイの友だちが授業で取り組んだダンスの映像を見ながら、一緒に踊る。
③ 世界一周旅行の創作劇の練習を通して、世界の文化を知る。
・韓国の食文化、イタリアのスポーツ、ブラジルの踊りを知り、挨拶の言葉などを覚えて、海外旅行の疑似体験をする。
④ たくさんの人に世界の人々と交流する素晴らしさを伝える。
・学習発表会で、言語や文化の違いを感じながらも、各国の人々と心を通わせる創作劇を演じる。

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 南米の陽気な音楽を気に入った児童が多く、繰り返し踊って楽しんでいた。音楽がかかると表情を明るくして声を出したり、手足を動かして自分なりに踊ったりする児童がいた。
◇ キムチの匂いに顔をしかめたり、サンバのリズムで元気よく踊ったりしていた。各自、役の国の人になりきろうとイメージし、話し方や身振り手振りを工夫する場面も見られた。
◇ 各国の言語の台詞を苦戦しながらも覚え、大きな声で演じられた。観客からは、6 学年らしい内容であったし、児童の演技から話の内容がしっかりと伝わってきたという感想をもらった。児童が、自分たちなりに話の内容を理解して取り組めたからこその仕上がりだったと思う。

＜共同作品＞「みんなの笑顔」

3 使用した教材

＜教材8＞ パラグアイの友だちの自画像作品
＜教材9＞ パラグアイの友だちの制作風景の映像
＜教材10＞ パラグアイの友だちのダンスの映像、音楽CD
＜教材11＞ 劇の衣装や小道具（チマチョゴリ、キムチ、ユニフォーム、ボール、サンバ衣装など）

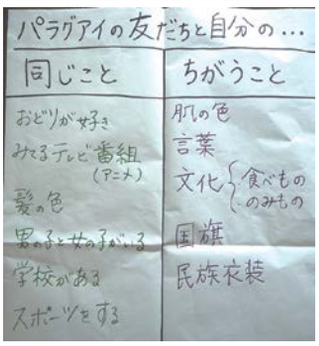
32-33 時限目「理想の世界を描こう」

この時限のねらい

・多様な文化の中で、心の同一性に気づくことができる。
・世界にはさまざまな問題があることを知ることができる。

1 子どもの活動の流れ

① パラグアイの友だちと自分の「同じこと」と「違うこと」を考える。
・これまでの授業を思い出し、パラグアイの友だちの手紙を参考にしながらポップコーン方式で意見を出す。
② 自分とパラグアイの人々の大切なものの共通点に気づく。
・自分にとって大切なものを紙に書く。大切なものについてのパラグアイの人のフォトアンケートを見て、気づいたことを発表する。
③ 大切なものがある世界を絵に描く。
④ 理想の世界を阻む問題があることを知る。
・学校に行けない世界の子どもたちについて、先生の話を聞き、感想を発表する。



2 子どもの活動の成果・反応

◇ 以前の授業やパラグアイの友だちの姿を思い出すのが難しい上、広い質問だったため、始めのうちは意見が出にくかった。狭い質問を繰り返して意見を引き出していくと、「違うことよりも、同じことの方が多いね」と言う児童がいた。
◇ 大切なものとして「家族」や「友だち」と書く児童が多かった。パラグアイのフォトアンケートを見せると、「家族」が多いことに気づいた児童がいた。
◇ 学校が好きな児童が多いため、学校に行けない子どもたちがいることに驚いていた。その理由を知ると、「そんなこと、あってはいけない！」と憤りをみせる児童がいた。文字の読み書きや計算ができないと困る話をしたことで、自分たちが学校で学ぶ大切さについても改めて確認することができた。

＜児童の理想の世界＞「家族が大切」

3 使用した教材

＜教材12＞ パラグアイの友だちからの手紙
＜教材13＞ パラグアイの人のフォトアンケート
＜教材14＞ JICA 教材『学校に行けない世界の子どもたち』

34-38 時限目「日本の当たり前って世界の当たり前？ セントレアで調査しよう」

この時限のねらい ＜通常学級６名対象＞

・自分にとっての当たり前が、みんなの当たり前でない場合があることに気づくことができる。
・外国の人との関わりを自分なりに楽しむことができる。

1 子どもの活動の流れ

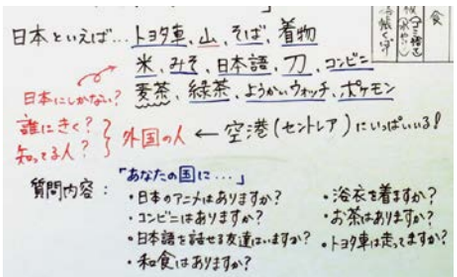
① 日本特有のものが本当に日本にしかないのかを考える。
② 外国の人にインタビューする準備をする。
・英文作成と、インタビューボード作成のグループに分かれ、それぞれ準備をする。また、インタビューの練習をする。
③ 修学旅行先のセントレアで、外国の人にインタビューする。学校で結果を集計し、気づいたことや感想を発表する。
④ もし、自分がよいと思っていることを人に否定されたらどんな気持ちになるのかを考える。

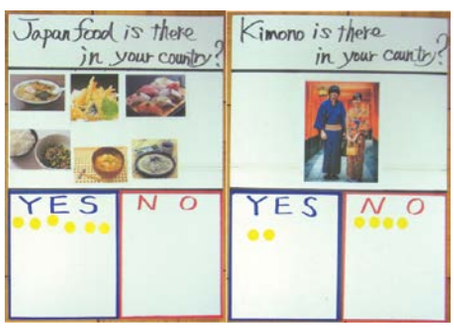
2 子どもの活動の成果・反応

◇ 話し合いの結果、絶対に日本にしかないと思うものとして、トヨタ車、着物、日本のアニメ、和食にまとまった。
◇ インタビューは、「楽しかった」「恥ずかしかったけど楽しかった」「緊張した」という感想があった。親切に接してもらえたことで親近感を感じ、とても達成感を感じた様子だった。
◇ インタビューの結果、意外と外国に日本のものがあることを知り、「そんなのおかしい！」と言う児童がいた。それについて、なぜ外国に日本のものがあると思うか問うと、「日本のものが好きだからだ！」という気づきがあった。それなら、みんなと同じ気持ちで日本のものを使っているのだねと付け加えると、「最初におかしいって言ったのは無しにしてほしい」と、自ら意見を撤回するという場面があった。
◇ 自分のことを否定された場合、嫌な気分、泣きたい、腹が立つなどと書いていた。また、逆に自分が友だちを否定したことがあるか振り返ってみると、「自分がされて嫌なことは友だちにもしない！」と言う児童がいた。そして、この授業でみんなが自信をもって発言するためのルール「どんな意見も◎（まる）」について、フィードバックすることができた。

3 使用した教材

＜教材15＞ インタビューボードとカラーシール





＜インタビューボード＞

＜お礼に折り鶴をプレゼント＞

＜人に否定されたときの気持ち＞

39 時限目「世界が平和になるために必要なことを考えよう」

この時限のねらい ＜通常学級 6 名対象＞

・人にはそれぞれの個性があることを理解し、自他の違いを認め合うことができる。
・世界にはさまざまな問題があることを知ることができる。

1 子どもの活動の流れ

① 自分の得意なことと名前を言う。隣に座っている友だちのよいところを一つずつ紹介する。【アイスブレーキング】
② 学校に行かずに働いている子どもたちについて知る。
・外国の子どもたちがタライと袋を持って外にいる写真を見て、どんな場面なのか考える。ナイジェリアの 12 歳の少年が、学校へ行かずに水を売る仕事をしている場面だという説明を聞き、その理由を考える。
③ 貿易ゲーム風のじゃんけんゲームを通して、どうして戦争が起こるのかを考える。
・一人一国の設定で、国同士のじゃんけん大会を行う。始めに各国に配られた5種の絵カードは、枚数も種類も違う。じゃんけんをして勝ったら相手国からカードを一枚もらい、制限時間内で多くのカードを手に入れる。ゲーム後、5 種のカードは、6 人に均等に配れる枚数ずつあったことを聞き、今回のじゃんけん以外で分配する方法を考える。戦争のしくみについて知り、戦争をしないために何が必要か考える。

＜じゃんけんゲームセット＞

2 子どもの活動の成果・反応

◇ 外国の子どもの写真を見て、「袋で遊んでいる」「バケツで洗濯をしている」という意見が出た。写真について説明すると、「学校へ行かなきゃいけないのに！」と言う児童がいた。働いている理由として何が考えられるか問うと、「学校へ行くお金がない」「住む家がない」「生活するお金がない」などの意見が出た。金銭的に貧しい国があることを理解した様子だった。
◇ ゲームはとても盛り上がり、熱心にカードを集めていた。本当の国も、自国を豊かにするためにそうやって熱心に戦っているんだよと話すと、少し難しかったようで「へ～」と言う程度だった。
◇ 最初のアイスブレーキングで、6 人にそれぞれ違う特技やよいところがあるとわかったように、世界の国々にもたくさんの違いがある。違うことは当たり前のことだと話した。世界が平和になるためには何が大切か問うと、「分け合うこと」「否定しないこと」という意見が出た。そのような気持ちが大切だと付け加え、「友だちや他の人を思いやる気持ち」が大切だとまとめた。

3 使用した教材

＜教材16＞ ナイジェリアの水を売る少年の写真
＜教材17＞ じゃんけんゲームセット（ミッション用紙、食物・水・服・車・家の絵カード各 6 枚）